

# サッカー競技における組織的行動の原理についての一考察

—4:2:4 システムの移入と展開を中心として—

恩 田 裕

(一)

スポーツ運動の内部構造や競技特性に近接する科学的手段として近年極めて多角的見地から、その自然法則性の抽出が試みられるようになった<sup>1)</sup>。特に身体運動の抽象的法則性の自然科学的追求と共に、人間の運動としての構造や特性に近接する手段としての具体的分析や、運動の意義及び価値を人文社会科学的立場から論議の対象とする傾向<sup>2)</sup>は、1959年の国際体育スポーツ医学情報会議<sup>3)</sup>の発足以来、国際体育概念研究会<sup>4)</sup>、国際スポーツ指導研修会<sup>5)</sup>、国際スポーツ情報学会<sup>6)</sup>等の活動と共に急激な進展を示している。

一方国内においても、岸野<sup>7)</sup>、金子<sup>8)</sup>、宮畠<sup>9)</sup>、川口<sup>10)</sup>、調枝<sup>11)</sup>らによつて、その立脚点に明確な相違はあるが、人間の運動としての諸現象を対象とする新しい運動学の構築が提唱されている。これを受けた近年運動技術に関する広範な論議が展開されている<sup>12)</sup>が、最も未開領域として残存しているのが集団的スポーツ運動に対する運動学的近接である<sup>13)</sup>。これは運動現象としての複雑さと共に、近接手段としての科学的領域の未成熟が積み重なり、体系的に確立した広範な他領域科学分野の導入をもってしても一義的に内容構造を把えたり、競技特性に近接することが困難なことを理由とする。

岸野は最近の運動学研究が運動経過の形態学的研究を重視している傾向

を指摘<sup>14)</sup>しているが、これはスポーツ科学の領域が人間の運動現象に関わることだけに、技術習得を志す者に与えられる情報や、その過程で加味される修正情報の質が粗雑であること、と同時にスポーツ運動の運動課題や運動技術としての認知及び形態学的考察が極めて幼稚な段階にあることを指摘するものもある。特に集団的スポーツ運動における運動現象を個別に把えることはその運動現象自体に関する認識、つまり情報としての当否が問題となるだけに極めて困難なのである。従って集団としての運動現象の認知を前提として、そこに派生する集団的運動形態を対象とした論議が必要と考えるのである。

運動学研究の中軸的手法は、スポーツ的な運動形態が成立又は変化する過程を自己の観察及び他人の観察を素材として、比較検討及び実験研究の対象<sup>15)</sup>とするものであるが、集団的スポーツ運動の場合はその技術構造分析や特性原理に関する認識が、科学的法則性や厳密な論理性を基盤としていないから、その運動現象の認知、つまり技術情報が極めて感覚的表現をとらざるを得ないこと、従って技術的情報としての質的信頼性が低劣なため正確な技術情報の把握は極めて難解な課題を含んでその検討が迫られているのである。然しながら岸野が述べる様に<sup>16)</sup>、長期の訓練と豊かな運動経験を積んだ一流競技者の所見は極めて高度な自己観察的価値を有し、研究者はこの所見を自己の運動経験に付加して他人の観察で補うことが可能であり、この運動学的解析の手法の応用をもってサッカー競技の現場で発生する運動現象を客観的に認知し、その自然法則性を抽出することも可能であると考える。

- 1) 岸野雄三、運動学の対象と研究領域、岸野雄三・松田岩男・宇土正彦編著、現代保健体育学大系、9、「序説運動学」、15—24頁、大修館、1968.
- 2) 金子明友、運動学から見たスポーツ、朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編著、「スポーツの科学的原理」、267—268頁、大修館、1978.
- 3) Internationale Tagung für Bibliographie und Dokumentation der Leibesübungen und der Sportmedizin. ヨーロッパを中心とする国際的な体育書誌活動の中核的存在。

- 4) 今日の体育学の最大の課題は、体育用語の概念を明確にすることとする立場からヨーロッパを中心として1960年頃から開催されている国際的研究会。成田十次郎は、ヨーロッパにおける運動技術論、として学校体育、第22巻、第3号、78—83頁、に詳しく報告している。
- 5) Der Internationale Lehrgang für Sportunterricht. ヨーゼフ・レックラ教授 (Recla, Josef) らの提唱によって1948年以来2年ごとに開催されている。スポーツ分野における研究、理論、実践に関する考え方や方法論の発表討議を主たる課題とする。又スポーツ運動に関する最新の文献内容、紹介及び書評と専門書籍や雑誌に掲載された主要論文をまとめたブックレットを発行している。
- 6) International Association of Sports Information =IASI. 1973年にユネスコの体育スポーツ情報ドキュメンテーション国際委員会 (International Board on Documentation and Information of Sports Science) が改編されたもので、各國委員会の書誌活動を支援し、国際交流の仲立ちを主たる目的とする。
- 7) 岸野雄三、前掲書。
- 8) 金子朋友、前掲書。
- 9) 宮畠虎彦、運動指導における感覚と科学的理論、体育の科学、第27巻、第8号、551頁。
- 10) 川口智久、スポーツ学の提唱、影山健・中村敏雄・川口智久・成田十次郎編著、「現代スポーツ論序説」、大修館、1977。
- 11) 調枝孝治、体育学研究の総括と展望、体育科教育、第27巻、第12号。
- 12) 代表的なものを下に掲げる。  
小林一敏、運動技術の概念規定の吟味、体育科教育、第21巻、第6号～第22巻、第2号、及び運動機構論、体育科教育、第22巻、第3号～第22巻、第10号。  
宇土正彦、運動の分類論、岸野・松田・宇土編著、前掲書。  
松田岩男、運動技術の構造、前掲書、及び運動技術の構造的把握、学校体育、第22巻、第3号。  
調枝孝治・萩原仁編著、人間の知覚運動行動、不昧堂、1975。  
影山健、スポーツ技術に関する社会学的考察、東京都立大学体育学研究、第五号。  
宮下充正編著、スポーツとスキル、大修館、1978。
- 13) 岸野雄三、前掲書、24頁。
- 14) 岸野雄三、前掲書、44—45頁。

15) 前掲書。

16) 前掲書。

## (二)

球技運動又はサッカー競技として、その技術構造や特性に近接する方向を示す一連の論議のなかで、永嶋<sup>1)</sup>はサッカー競技の技術は味方が協力して相手と対峙し、効果的な攻防の技能発揮を目指すもので、集団が一個のボールを争奪する競技としては、相手の直接的妨害を排除しつつの技能発揮が当然として、この技能を個・部分・全体の協力による技能の三形態の融合として把え、特性はコンビネーションプレーにあると述べている。更にこのコンビネーションを支持するのは、個人の技術水準に応じたプレーの予知予測を基調とする味方と同質の状況判断であり、この「プレーの先取り<sup>2)</sup>」の技術の体得が今後の指導の中心であるとする要旨の見解を述べている。

荒木<sup>3)</sup>は個人技術・集団技術・戦術の相互の関連性に着目し、次のプレーの「読み」や「判断」を含めたコンビネーションプレーに球技運動の基礎技術としての論理がある旨の知見を示している。又稻垣<sup>4)</sup>は球技運動の戦術的側面を、運動経過の対象となる技術概念の範疇外とする金子<sup>5)</sup>の知見を基本的に支持し、戦術及び戦術行為が球技運動の中核的存在である旨の知見を述べている。

平木<sup>6)</sup>はスキルを予測・選択・実行として把える立場を支持し、個々の技術の評価は常に戦術的アイデアを含めた評価に高めるべきだと述べている。サッカー指導法研究会<sup>7)</sup>はサッカー技術を集団単位の攻防の技術として把え、運動技術を運動実践過程における状況判断と、これに起因する大筋的動作に分析出来るとする見解を示し、山中<sup>8)</sup>は個人スキルの充実によって支持されたスマールグループのコンビネーションとチームシステムが常にフィードバックする関係を重視した指導体系を明らかにしている。これらの知見には論議の対象となる未解決課題が多いが、共通する運動現象

認知は、集団としての技術が中心的存在であり、個々の技術の集積ではないこと、及び技術と戦術の概念はそれぞれ独立して認識されるべきではない、とする立場である。

サッカー競技は集団対集団の対等条件下での一個のボールの争奪を原理的帰結とし、何れの集団がボールに対して、より主体的立場にあるかを判断の基調として、攻撃及び防禦的立場に分別出来ることを前稿に示した<sup>9)</sup>。攻防両機能に対する経済性と合目的性<sup>10)</sup>が追求された結果、そこに集団としての組織的行動の原理が形成されたのは周知の事実である。この組織的行動の原理が実際の競技を通じ陶汰を繰返しながら<sup>11)</sup>、高度な身体的能力や技術的習熟を権威的背景として定着し、客観的に認知される段階まで進展すると、これを観察し表現する第三者の抽象性を補助する意味で定型化が行われ<sup>12)</sup>、今日サッカー競技のシステムとして知られる原理的認識が形成されたのである。

スポーツ運動の運動形態が他へ転移される場合、直接的模倣から類似行動に移行するのが一般的であるが、直接的観察の対象がない場合や集団的な運動形態の技術情報転移に際しては、日常的手段として指導者及び学習者の便宜のため、その行動原理を極度に単純化し定型化したものが実体的認識として伝達される場合が多く、運動現象の複雑性が高まれば高まる程その傾向は著しくなる<sup>13)</sup>。特に情報伝達経路の末端に位置する我国では、より一層単純化され定型化された情報が伝達され、時には本質を無視した課題解決のための極度に形式化し、固定化した情報として伝達された可能性が強い<sup>14)</sup>。又集団的スポーツ運動の攻防は相対的なものである為、対立関係にある集団の力量によって相互に変容した運動現象が認められるのは当然のことであり、その機能を保有する集団を観察したとしても真価が見極められるとは限らない。まして組織的行動の原理を根拠とする集団の機能は、高度な熟練性を伴う個々の競技者の個性的技術、及び個人技法とは隔離された様式の進展した技術によって被覆され、容易にその実体を把握することが出来ない。従って本稿では集団の機能を全体としての機能及び

そこから抽出された機能、つまり一般的機能と、個又は部分による個性化され様式化された機能、つまり特殊機能とに分別し、その後者を剝離することが必要だと考えるのである。そしてこの一般的機能を抽出する作業を通して集団としての技術の実体が明らかとなり、技術及び戦術の概念上の混乱についても言及出来ると考える。

- 1) 永嶋正俊、第27回日本体育学会体育方法専門分科会シンポジウムにおける発言要旨。
- 2) 岸野はマイネル (Meinel, K.) の「先取」(Anticipation) や、ウェルズ (Wells, K. F.) の「判断」(Judgment) についての詳細な報告を行っている(前掲書)。最近のサッカー競技では「予測」という言葉が使われている。
- 3) 荒木豊、球技運動の技術構造と指導系統、山梨大学教育学部紀要、第4号、1970.
- 4) 稲垣安二、球技における戦術体系の一考察、日本体育大学紀要第6号；スポーツ競争の戦術に関する一考察、体育科教育、第27巻、第5号；球技に関する研究—その特性概念分類について、日本体育大学紀要第8号、；スポーツ競争の戦術に関する一試論、日本体育大学紀要第9号。
- 5) 金子朋友、運動技術論、岸野・松田・宇土編著、前掲書、100頁。
- 6) 平木隆三、システムおよび戦術、岡野俊一郎・浅見俊雄・平木隆三・鈴木義昭・長沼健共著、スポーツの科学的指導「サッカー」、不味堂、1976.
- 7) サッカー指導法研究会、井田国敬・大渕正雄・齊藤昭夫・成田十次郎・松本光弘の編集による「最新サッカー指導法教本」、日本体育社、1976.
- 8) 山中邦夫、コーチ学 (コンビネーションサッカー編)、新体育学講座77、逍遙書院、1980.
- 9) 恩田裕、サッカー競技の得点推移、成城法學「教養論集」、第1号。
- 10) 金子朋友、運動技術論、前掲書、102—104頁。金子は運動技術の合目的性と経済性に関する精緻な論議を展開し、「スポーツ運動技術とは現場で発生し、かつ検証されたある一定のスポーツ運動課題の最善の解決法である。この課題解決の仕方は合理的でなければならず、換言すれば現行競技規則の範囲において、より高いスポーツ運動の成果を達成するための合目的的かつ経済的な仕方で行わなければならない」とするマイネルの概念規定を基本的に支持している。
- 11) Joy, Bernard., "Soccer Tactics", Phoenix House, 1962.
- 12) 金子朋友、前掲書、113—115頁。
- 13) 前掲書。

- 14) 竹脇重丸, サッカー, 旺文社, 1956.

戦後, 東京オリンピックに至る低迷時代の日本サッカー界における指導書として重要な役割をはたした。その原理的認識と実体的認識が明確に区別されていることは高く評価出来るが, 現状認識の立場からの現実的対処の方策は極めて固定的である。

### (三)

由来, サッカー競技の技術的進展は英國を中心とするヨーロッパ主導型<sup>13</sup>であったが, 1958年, 第6回ワールドカップ大会においてブラジルチームが4:2:4システムをもって世界に君臨<sup>14</sup>したことを契機として対人防禦を基調とするヨーロッパ型と, 地域防禦を基調とする南米型の, 技術的システム的対立関係が形成され<sup>15</sup>, この両者の拮抗を基盤として競技力は著しい進展を示している<sup>16</sup>。現在では4:2:4システムは4:3:3又は4:4:2と後方配置の競技者数を増加させる傾向に進展を示しながら, 徐々に最高度の熟練性や風土気質による個性化・運動様式化を進め, 特殊機能的側面のみが顕著になり, 一般的機能が看過される傾向を強めている。

かつて3FBシステム時代には, 競技者機能として専門分化された役割機能が重要視されていたが<sup>17</sup>, 4:2:4システムにおける競技者機能はボジショジのみならず攻撃と防禦の両機能が等しく要求される総合機能に変化し<sup>18</sup>, この上に特殊な能力を持つ競技者の個性が付加されることによって, システムの実体的認識が極めて困難になって来ている。例えば平木<sup>19</sup>はシステムを競技場内における競技者の基本的配置として把える立場から, 今日リベロの先駆として周知の, エレラ率いるインテルナチオナーレの駿足フルバック, ファケッティの攻撃参加を例証して, この様なバックの攻撃参加はシステムの議論を越えた意外性を含む競技者の機能の問題だと述べている。又1974年のワールドカップにおけるオランダのローテーションサッカーに関しても, 現在のサッカーは個々の選手の特徴を機能的に如何に活かすかが問題であってシステムという固定観念は排除すべきだとする

立場を明らかにしている。然しこれはシステムの本来的機能つまり集団が、より効果的に機能すべくその経済性と合目的性を追求した結果、そこに形成された意図的かつ組織的な行動の原理を根拠とする競技者の時空的位置変化に、特殊な機能を持った優れた競技者により、個性的に変容された部分が付加されたことなのであって、システムの一般的機能が消滅したことではない。つまり個々の競技者の特徴を機能として如何に展開させるかはシステムの最も重要な部分であり、固定観念として覚えることは本来的な姿の認知ではない。システムはその必要性が歴史的時間の内に徐々に形成されたものであって<sup>9)</sup>、特殊機能が付加され続けて来たとしてもその必要性において、つまり経済性と合目的性に変化がなければその立場を変えることはあり得ない。

多和<sup>9)</sup>は昭和初期の日本サッカー界に重要な影響を与えたものとしてネルツ (Nelt, O.) の “Fussball” を挙げ、特にその戦術論に着目し詳細な紹介を行っている。それによると戦術とは、「攻撃と防禦を労力を浪費せずに完全に展開するための頭脳的努力」と定義し、これに従って競技者は “Decken”<sup>10)</sup> と “Freistellen”<sup>11)</sup> の二つの基本的観念の実現に努めねばだとすると述べられている。この原本は披見出来なかったが、その運動学的思考体系は極めて興味深い。つまりデカルト的世界における二元論が精神と身体の別個の存在を認めた<sup>12)</sup>と同様に、サッカー競技において集団と集団が一個のボールを争奪する段階に生じた攻防の機能、即ちボールと人との関わり合いにおいて生じた身体的機能を技術、人と人との関り合いに生じた精神的機能を戦術又は戦法と呼び、上位機能として精神機能を位置づけていると解釈出来る。当然残された時空的位置変化としての移動機能、つまり地面に対する機能が体力でなければならない<sup>13)</sup>。然し現在我々はその具体的「生」の大部分を精神とも身体ともつかぬ独特の構造のなかで送り、この独特の構造の抽象化された一局面が精神であり身体であるとする市川<sup>14)</sup>の立場からは身体的機能と精神的機能は競技者内部で完全に合一する部分の存在として認識されなければならない。これは調枝<sup>15)</sup>のいう入力

系としての精神機能つまり知覚であり、出力系としての身体機能、つまり運動行動とする立場や、金子<sup>16)</sup>の述べる「自ら動き、動かされる人間」の運動現象としての立場と矛盾しない。つまり運動現象として技術と戦術を同一機能の両側面的な存在として認識することは、攻防の技術を集団の技術として使えることと同様に必然なのである。

サッカー指導法研究会はサッカー技術を集団単位の攻防の技術として把え、その運動技術を運動実践過程における状況判断とこれに起因する大筋的動作に分析出来るとする見解を示していることは前に述べた。つまり入力系としての情報処理能力と出力系としての競技遂行能力の分別である。ここで若干問題となるのは状況判断が必ずしも自己の領分として自由に遂行出来るとは限らないことで、相手による強制が介在する危険がある。調査<sup>17)</sup>はスキルが遂行される環境の安定性の多少によって自己受容フィードバック (Proprioceptive Feedback) からの情報をもとに状況判断が行われる閉鎖スキル (Closed Skills) と、たえず変化する事態への適応力 (adaptability)，柔軟性 (flexibility)，先見能力 (anticipation) が必要な開放スキル (Open Skills) があるとするポールトン<sup>18)</sup>の知見を報告している。この環境が無限に変化する状況下では、その判断が極度に強制され、時には判断は可能でも反応出来なかったり、反応準備のための時間的余裕が全く無いこともあります、従って事前に合目的的行為に対する危険に対処する手段が準備される必要が生ずる。サッカー競技の防禦的立場は特に開放スキルの占める割合が高いが、これは攻防が相対的なもので、その主体性が殆どの場合攻撃側にあるからである。従って防禦的立場には事前に集団内成員に共通の、環境変化に対応する手段を講ずることが特に必要なのである。

1) Lodziak, Conrad, "Understanding Soccer Tactics", pp. 52—68, Faber, 1966.

2) Weisweiler, Hennes, "Der Fussball", pp. 69—73, Karl Hofmann, 1968,

- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*
- 5) Greaves, Jimmy, "Soccer Techniques and Tactics", Pelham, 1966.
- 6) FIFA, FIFA World Cup 1974 Final Competition Technical Study, pp. 69—71.
- 7) 平木隆三, システム及び戦術, 前掲書, 189頁。
- 8) Joy, Bernard, *op. cit.*
- 9) 多和健雄, サッカーの技術史, 岸野雄三・多和健雄編, 「スポーツの技術史」, 大修館, 1972.
- 10) Decken とは今日, 日常的に使われているマーク及びカバーの両概念を併合したものであって, 相手側競技者のボール保持に対する妨害行為を意味する, と多和は述べている。
- 11) Freistellen とは味方の競技者からパスし易く, 自分はパスを受け易く, 然も相手側競技者の干渉を受けにくい位置を占めること, と多和は述べている。
- 12) Pescartes, René, 井上・小野訳, デカルト, 「哲学の原理」, 中央公論。
- 13) この機能は重要な課題として論議の対象とする必要がある。1974年のワールドカップにおける, FIFA の Official Technical Study では, 今後のサッカーの発展のためにすぐれた競技者の行動の特徴を特別に研究する必要があることを示し, オランダのクライフ (Cruyff, Johannes) は素早く反応し収縮できる瞬発力のある筋肉を保持しているから, 相手より素早くストップし素早くスタート出来るとしている。
- 14) 市川浩, 「精神としての身体」, 4頁, 勱草書房, 1977.
- 15) 調枝孝治, 人間の知覚—運動行動とシステムの概念, 萩原仁・調枝孝治編著, 「人間の知覚—運動行動」, 不昧堂, 1975.
- 16) 金子明友, 運動学から見たスポーツ, 前掲書, 267—268頁。
- 17) 調枝孝治, 運動学習, 松田岩男編, 「運動心理学入門」, 83—85頁, 大修館, 1976.
- 18) 前掲書, Poulton, E. C., Environment and Human Efficiency, 1957.

#### (四)

これまでスポーツ運動科学としてサッカー競技に対する近接手段を述べて来たが, ここでは技術情報として我国で4:2:4システムが, 現実にどう認識されていたかを情報伝達経路に残存している若干の資料を通して論

議の対象とする。前述の通り、集団的スポーツ運動の技術情報はその質的信頼性を欠く場合が多いことを考慮して、資料は比較的信頼度が高いと思われる、又初期情報に接する機会の多かった代表チームの監督、コーチの報告を主とし、加えて最も客観的立場の観察者として報道関係の中からサッカー競技に関連する掲載記事の最も多かった朝日新聞縮刷版を補助として選定し、その内容を要約して示した<sup>1)</sup>。現在と比して当時の情報量は極めて少なく、質的には間接情報に特有の表現上の問題や、運動現象の抽象性のための若干の誤記的要素は否定出来ない。特に一般競技者の理解の程度は記憶が主となり、その信頼性に検討の必要があり割愛せざるを得なかった<sup>2)</sup>。

3 FB制戦法<sup>3)</sup>の導入に関して竹腰は<sup>4)</sup>、この大会（ベルリン・オリンピック）から得たものは単に3 FB制戦法の導入に止まらず、ボール扱いの巧みさの程度と戦法、体格と戦法との関連等、サッカーの基本的事柄に大きな示唆を受けたと述べ、競技者として参加した堀江<sup>5)</sup>は、大会前、地元のサッカークラブとの対戦で初めて3 FB制に直面し、日本サッカーの守備陣型の欠陥を克服する方法を直観的に学ぶことが出来、大きな成果を挙げ得たのは、根本に強い問題意識と解決方法の模索があったからだとする見解を示している。又新田<sup>6)</sup>はアーセナルクラブ創案による3 FBシステム以前に慶應及び神戸一中の苦心の戦法があった事実を指摘しているが、これを客観的存在として容認するには疑問がある。従って3 FB制はベルリン大会から導入されたとするのが妥当である。埼玉師範の中村<sup>7)</sup>は1938年（昭13年）の第20回全国中等学校蹴球選手権大会から3 FB制を導入し、オリンピック土産によって攻防共に戦法が一段と向上したと述べていることから、その国内普及は比較的短時間に行われたと判断出来る。

戦後は1951年（昭26年）11月、ヘルシンク・ヴォリーの来日<sup>8)</sup>を筆頭に、オッヘンバッハキッカーズ<sup>9)</sup>、ユールゴールデン<sup>10)</sup>と有力チームの訪日が続き、ここで初めて本格的3 FB制の時代に入る。1953年（昭28年）2月、朝日新聞の大谷<sup>11)</sup>はサッカーフォーメイションと題して3 FB制に関する解説を大々的に報じている。又この年世界学生権手権大会に代表を送り<sup>12)</sup>、

その後の大学サッカー進展の基礎を創っている。又ヘルシンキ・オリンピックには参加出来なかったものの竹腰を視察員として派遣し外国の動向を報告せしめている<sup>13)</sup>。これによると、ブラジルが 2 FBによるゾーンディフェンスを採用していた以外は、大方16年前と変化なく 3 FB制が支配的であるが、プロの試合ではボルトシステムという新戦法がとられていたと報告されている<sup>14)</sup>。同年イギリスがウェンブリー競技場でハンガリーに敗れ、国内無敗に終止符を打った。当時のハンガリーチームが常用していた深く下がった CFが後年の 4:2:4 の原型とする見方もある<sup>15)</sup>。

1955年（昭30年）1月、スイスからグラスホッパーが来日、このチームは今日スイスリーガルとして知られるシステムを採用していた。朝日新聞は<sup>16)</sup>、同チームの戦法は今まで日本で知られていない南米型の 5:3:2 の布陣で、FBは二人制で斜めに位置し、戦況に応じ、交互にポジションを変える。又防禦では「かんぬき型」という珍しいシステムを見せ、これは味方でマークした相手がボールを奪ったら常に近くの味方が応援に出て二人でボールを奪い返すという法である旨の紹介を報じている。対戦後戦評として中条<sup>17)</sup>は、グラスホッパーは日本で初見の、2 FBのうち一人は常に退り両 SHは両 ウィングをマークし FBが殆んど縦になる典型的ボルト戦法（3 FBの後方に常に一人のバックがいる）であり、FWは一人のインナーが退り殆んど四人、CHは常に前進し攻撃していたと述べている。又大谷<sup>18)</sup>は、彼等自身がリーガルと呼ぶこのシステムはウルグアイ・ブラジルと同型であり、二人のFBは中央に縦に並び、前方のFBが日本のCHの役をなし、二人のSHはFBのように翼を守る。CHは前進して中盤を中心に前後左右攻守に働く、一人のインナーは後退してCHと共に中盤を受持ち二人で日本のSHの役目を果す。FWは四人が前線にあり、4:2:3:1 の布陣であると報じている。当時の我国においては競技者の背番号はポジション別に、その役割機能と共に固定的なものとされ、3 FBシステムが極度に定型化され、錆型化していたことを示している。従って中央に縦に位置するFB（背番号 2 番と 3 番の競技者の意）とか、SHの機

能を行うCHとかの矛盾した表現をとらざるを得なかつたのである。この競技者配置は今日の4:2:4システムと殆んど同様で、中央に二人が縱に位置するのが特徴的であるが、相手の最前線が4人になれば当然並列に変化したであろう。

1957年（昭32年）10月、中国遠征を行つた日本代表チームは全解放軍八一と対戦し、彼等のフォーメイションが4:2:4:1のハンガリー型で、英國型でないことは日本と同様であり、日本チームも今夏から練習した4:2:4システムで戦つたと竹腰は述べている<sup>19)</sup>。これが我国における4:2:4システムの最初の試みである。

国内試合において3FBシステム以外のシステムで成果を挙げたのは早大をもって嚆矢とする<sup>20)</sup>。中条は関東大学サッカーリーグ、早慶戦における6人バックのボルトシステムを指摘しているし、その総評でも、近来日本のサッカーが守備本位に傾きつつあること、得点する努力より防ぐ努力の方が効果的であり、早大が6人防禦で効果を挙げたことが優勝の最大の原因であると評価している<sup>21)</sup>。

1958年（昭33年）、第6回ワールドカップ大会においてブラジルチームは4:2:4システムをもって世界に君臨<sup>22)</sup>したが、オリンピック至上主義の我国には、この大会の技術情報は全く伝達されていなかった。

1959年（昭34年）11月、関東大学リーグの技術と戦術に関し竹腰は、3FBシステムはこの数年我国で一般に用いられてきた体制であり理解し易い体制であるが、守備者の一人が弱いと破綻するので安全率の高い4:2:4とか4:3:3の体制に移っている国が多いことを述べ、1958年秋の関東大学リーグにおける早大のボルト戦法は試みとして評価出来ても攻守のバランスから見れば少し守備に重点を置き過ぎるとし、現状では特定の相手に対する守勢作戦ならとんに角、4:2:4体制がもっと能率的となるためには全員のボールコントロールが一段と進歩し、特に守備者のパスの能力、FWの動きの強さ、滑らかなトラップ等の技術的裏づけが必要である<sup>23)</sup>としているが、この守備重点策としての人数的優位及びボールコントロール

の必要性をシステム機能として把え、特に守備者のパス能力を指摘しているのは当時の状況を如実に示すものとして興味深い。

1959年（昭34年）4月、第一回アジアユーストーナメント、対マラヤ戦で相手のC F、ブーンビーを抑える目的で4:2:4を採用したことが高橋によって報告されている<sup>24)</sup>。

1960年（昭35年）1月、ペルーチーム<sup>25)</sup>、11月にソ連からロコモチフが来日<sup>26)</sup>、南米型の本格的4:2:4システムの披露が期待されたが、気候、グランド、日本側の力量等諸条件が整わずその真価に触れ得なかった。

同年12月、日本蹴球協会の招聘に応じたクラマーは6週間の滞在の後、WMシステムは早くから単に図式的に使われて来たのではなく弾力的で融通性に富むものであり、型というのは芸術において特別な個性の表現であるが、サッカーにおいても全員で競技の課題を解明しようとするやり方を意味し、この型は競技者の個性から生ずる。従って日本の課題は日本選手の個性を考えて日本的な型を発展させることにあると述べている<sup>27)</sup>。

これは明らかに日本サッカー競技界のシステムに対する考え方が図式的であることの指摘であり、チームづくりを念頭に置いた発言であるが、この真意が正しく伝わったかどうかは疑問である。

1960年（昭35年）8月、竹脇は4:2:4システムの隊形に関して、攻撃力が弱まらないようにすることがこのシステムの難しい点で中距離の縦パスを正確に通し受けて、確実にボールを回して最後の決定的瞬間まで相手にボールを奪われぬ技術が必要で、日本の単独チームの技術水準では守備と攻撃の転換が難しく、このシステムは推薦出来ないと述べ、ただ守備に偏した「作戦」として相手のC Fを二人掛りで守ることは良く見られ、形の上では4:2:4になっていると述べている。ここでは型と機能は明らかに区別して把えられているものの、国内普及が推奨出来ない理由としては極めて矛盾した見解が述べられている<sup>28)</sup>。

1961年（昭36年）11月、ユーゴナショナルチームのチリックコーチの談話として4:2:4システムに関する若干の報告がなされている<sup>29)</sup>。これに

よると、① 4:2:4の布陣における中間の2人は隨時入れ代る。② 攻撃している時は前の4人と中間の2人は厚みをつくり、二次攻撃が出来るようとする。③ 活発なポジションチェンジによってゴール前に空いた場所をつくる、又ウィングは守備と攻撃をつなぐ重要な役割をもっている。④ 防禦は後方の4人と中間の2人で厚みをつくりペナルティーエリアの前方10—15ヤードに布陣する、として明らかに一般的な機能が述べられているが、これ等が固定的な職能分割型として認識された可能性がある。

1961年（昭36年）3月、ブラジルからマドレーラクラブが来日したが、悪条件のため本来のシステムとしての真価が發揮されていないことが各種の記述にうかがわれる。

1962年（昭37年）11月、チリ、ワールドカップでの経験と観察を検討したチャナディ（Csanadi, Arped）の見解を岡野は次の様に報じている<sup>80)</sup>。① テクニック分野、特にフェイント動作は南米が優位である。② システムに関する形式主義は存在しない。③ 試合のシステムは競技者の個性と相手側によって変化し、競技者はどんなシステムにも適合出来るように訓練されている。④ システムの変化に勝つ方法は守備における数的優位と攻撃における素早い変化である。即ち組織された防禦システムに根拠を持つ近代サッカーでは、スピードのあるウィングからの攻撃でバックの裏側に入り込むことが効果的である。この見解は技術が優位の南米型を押える目的でヨーロッパ勢が多用したロンドン大会のスヴィーパーシステムとして具体化されている。又ヴィトラエル（Vytlael, Rudolf）の見解として岡野は、チリ大会より前に4:2:4システムは徐々に消滅しかかっているとする専門家達の意見には反対で、逆に進歩と改良の大きな可能性が述べられていることを報じている<sup>81)</sup>。

1962年（昭37年）12月、ソ連及びスウェーデンを招いて三ヶ国対抗競技会を開催<sup>82)</sup>。スウェーデンのリンドバーグコーチは、4:2:4システムに対抗するには4:2:4システムが良いとする立場を明らかにし、日本選手は根本的にどのシステムでプレーするか知っていても実際にそのプレーを

行っていないとする厳しい指摘を行っている<sup>83)</sup>。又モスクワディナモのボノマリョフコーチは、当チームの4:2:4システムはブラジル型に最も近く、原則として強い守備を目指していること、これは守から攻に変るのが難しく全競技者の技術が良くなければ出来ないこと、日本チームが4:2:4システムを採用することの可否については何とも言えないとし、優れた個人技の必要性を強調している<sup>84)</sup>。

1963年（昭38年）1月、日本ナショナルチームの西独遠征報告<sup>85)</sup>として岡野は、一般的傾向として4:2:4はすでに終ったとする立場を明らかにし、一つのシステムに拘泥しては勝てない、必要な動きがあればどんな型であろうと思い切ってやる、従ってシステムを行うために選手を養成していくは決して勝てないのであって逆に選手が自然にシステムを創り上げるのだという点が各国共通の考え方であるとし、クラマーも東京大会ではWMシステムでは通じないので今から選手の個人技を高め、どのようなシステムでもこなせるようにしたいと述べていることを報告している。これは代表チームを構成し育成する立場としては当然の立場であるが、その背景にシステム機能が正確に分析抽出され、理解され、指導体系に組み込まれていることが必要であったが、一般的には実体構造の解明や原理的要素の抽出作業が行われた形跡は認められない。当時ヨーロッパ諸国では4:2:4システムの末期に入っており、すでに次のシステムの胎動が始まっている、高度の熟練性と個性による特殊機能面が大幅に付加され、その一般的機能が把握しきれない状況にあった<sup>86)</sup>。然し国内の大部分のチームが依然としてWMシステムに拘泥していた理由は不明である。

1964年（昭39年）10月、東京オリンピックに参加したチームは全て4:2:4システムを採用していた<sup>87)</sup>。この大会終了後長沼は、外国チームと戦うために必要な条件として、① 個人的基礎技術及び戦術、② グループによる技術・戦術、③ チームによる技術・戦術、④ 基礎体力・諸筋力等の養成、⑤ ポジションプレーの相互理解と実施、の五項を挙げている<sup>88)</sup>が現状認識による反省点に立脚した指導体系の方向性の指摘と考えて

良い。

岡野は、システムが選手に役割を与えるのではなく、選手がシステムを作り使うということ、又選手の個人技がシステムを作り出す基礎であること、こういった現在のサッカーの定理とも言うべき点、及び個人技の指導法などの点に関する方向性に誤認はないと言ふべると共に、日本チームの最大の問題点は意外性つまりプレーの変化の可能性の欠如であるとし、個人の意外性、つまりフェイントプレーの欠如はボールコントロールとボディバランスが完全に身についていないことに起因すると指摘し、又チームの意外性はその瞬間にパスの通るコースが幾つあるかということで、状況判断力が質量共に劣っているためだとし、状況判断力を如何に養成するかは今後の選手指導の上で非常に大きな、かつ困難な課題だとする見解を述べている<sup>39)</sup>。

然しながら運動技術は創造的な運動形態を特殊な能力をもった競技者が開発し、その運動形態が次第に定着し、多くの人々に伝承され、公共性を帯びて客観的存在となるものである<sup>40)</sup>。この段階で多くの場合、全く創造的な運動形態は模倣から次第に類似した運動形態へと移行するのであるが、この段階で指導者が学習者の理解を補助するため、技術習得の便法としてその技術の特徴的な運動形態を鋳型化し、その単純化されたパターンを反復練習させることによって技術習得の合理化をはかる傾向があることは前述の通りである。この様にして転移された技術の最大の欠陥は、環境の急激な変化に対応する柔軟性、適応性に欠けることである。技術を鋳型化したパターンを基礎技術としてそれをドリルすることがボールコントロールであり、そこに適当な状況判断をオーバーラップさせる技術構造の認識からは創造的な運動技術は発生しないばかりでなく、先行する技術に追従することも容易ではない。

1964年（昭39年）11月、全日本実業団サッカー選手権大会に優勝した八幡製鉄<sup>41)</sup>、関東大学一部リーグに好成績を納めた早大・中大・明大・立大<sup>42)</sup>、東西大学王座決定戦における明大・関大<sup>43)</sup>、1965年（昭40年）1月

表7 全国高校選手権大会・全日本選手権大会・関東大学一部リーグ 年次別得点推移

		1954										1960										1965										1970										1975									
		年		29		30		31		32		33		34		35		36		37		38		39		40		41		42		43		44		45		46		47		48		49		50		51		52	
試	合	得	点	15	19	19	24	24	24	25	25	25	31	31	31	31	31	31	31	31	31	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	24	24	24	24	27	28	28	28	28	29	29	29								
勝	負	得	点	55	65	60	92	87	64	73	81	97	62	77	85	41	46	45	43	32	53	40	73	67	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	73	73	73											
平	A.	得	点	9	15	17	20	15	14	16	15	12	13	23	20	10	13	11	10	6	12	9	14	11	19	19	23	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16													
試	合	得	点	4.27	4.21	4.05	4.67	4.25	3.25	3.56	3.84	3.52	2.42	3.23	3.39	3.19	3.69	3.50	3.31	2.38	2.71	2.04	3.22	2.70	3.43	3.35	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36	2.36								
勝	負	得	点	6.11	4.33	3.53	4.60	5.80	4.57	4.56	5.40	8.08	4.77	3.35	4.25	4.10	3.54	4.09	3.40	4.30	5.23	4.42	4.44	5.21	6.09	4.05	3.61	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06	4.06						
平	A.	得	点	3.00	2.63	2.76	3.30	3.00	2.08	2.28	2.64	2.74	1.58	1.71	2.10	1.94	2.06	2.13	2.06	1.63	1.71	1.25	2.19	2.00	2.07	2.00	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90	1.90							
試	合	得	点	16	16	16	16	16	16	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	7	22	8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	21	25	25	25	25	25	25	25	25	25								
勝	負	得	点	53	49	53	43	59	64	56	44	39	30	17	67	31	19	23	24	20	21	27	65	61	63	50	67	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77							
平	A.	得	点	9	13	13	7	7	7	8	10	10	6	16	6	6	7	7	5	7	7	7	7	7	16	16	15	9	14	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21					
試	合	得	点	3.88	3.88	4.13	3.13	4.13	4.44	4.44	4.27	3.60	3.06	3.29	3.77	4.63	3.13	4.33	3.63	3.63	4.00	4.36	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38	3.38										
勝	負	得	点	5.89	3.77	4.08	6.14	8.43	9.14	7.00	4.40	3.90	2.83	4.19	5.19	3.17	4.06	4.86	3.00	4.06	4.86	2.86	3.00	4.06	3.81	4.20	5.35	4.79	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67					
平	A.	得	点	2.75	2.25	2.50	3.25	3.25	3.44	3.20	2.27	2.60	1.57	2.27	3.00	1.75	2.65	2.38	1.86	2.06	2.36	2.33	1.76	1.92	1.64	2.12	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07	2.07							
試	合	得	点	20	21	21	23	23	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28										
勝	負	得	点	65	62	63	77	91	81	100	97	81	83	63	98	74	64	65	60	66	66	57	48	70	53	78	84	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49						
平	A.	得	点	13	19	19	26	23	25	20	39	21	22	21	13	19	20	28	25	25	29	18	23	19	19	12	25	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18						
試	合	得	点	3.90	3.86	3.88	3.57	4.00	3.61	4.95	4.21	3.68	3.71	2.71	4.18	3.36	3.29	3.21	3.04	3.39	2.68	2.64	3.18	2.57	3.21	3.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39	2.39							
勝	負	得	点	5.00	3.26	3.19	3.55	3.64	4.05	2.56	4.62	3.68	4.85	5.16	3.70	2.29	2.60	2.40	2.28	3.17	2.09	3.68	2.79	6.50	3.56	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72								
平	A.	得	点	2.60	2.05	2.04	1.83	2.07	2.18	2.18	2.71	2.11	1.79	2.82	1.22	1.23	1.43	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25														
備	考																																																		

の全日本蹴球選手権大会<sup>44)</sup>における八幡・古河・東洋の各チームはいずれも4:2:4システムを採用している。特に関東大学リーグに関し岡野は、4:2:4システムの本来的なものと異質な、守備に重点が置かれたものとして、その攻撃力の低下を指摘し、状況判断と個人技の不足を理由に、完全な4:2:4システムをとり得るには数年の時間が必要とする見解を述べている<sup>45)</sup>。又全日本選手権大会に関しても、4バックの守備的効果と攻撃力減少の相対的関係について、防禦から攻撃への移行が不充分であると指摘している<sup>46)</sup>。又大谷は、最近の守備的傾向にあれ、この傾向は世界的なもので試合の膠着状態が興味を半減させると述べている<sup>47)</sup>。

表は、全国高校選手権大会、全日本選手権大会、関東大学一部リーグの年次別得点推移を資料に基づいて作表したものである。この表中、関東大学一部リーグの試合数は殆んど変化がなく、他は大きく変動していることを考慮する必要があろう。特に高校選手権大会は昭42年から40分ハーフに変更になっている。

大学チームが本格的に4:2:4システムを採用したのは、1964年東京オリンピック直後からである。この年の得点推移に顕著な変動が見られること、1966年イングランドワールドカップ大会において、スウェーパーシステムが登場して以来、得点が顕著に減少傾向を示していること、又この頃から勝チーム得点が減少し、若干ではあるが敗チーム得点が増加傾向にあることに注目したい。なお高校選手権大会では、1966年（昭41年）頃から4:2:4システムが採用されている<sup>48)</sup>。

- 1) 引用は出来得る限り原文に忠実であることを心掛けたが、比較的主題と直接的関連のない事項についての記述は削除した。尚表現上の問題が残るので原文に現われた用語例はそのまま使用した。
- 2) 当時の競技者及び関係者の口述資料等については、今後の検討課題といい。
- 3) 当時の最も一般的用語例である。3FBシステム又はWMシステムと同義に使用されている。
- 4) 竹腰重丸、前掲書、22頁。

- 5) 堀江忠男, 前掲書, 68—69頁。
- 6) 新田純興, 日本蹴球協会編, 「日本サッカーの歩み」, 114頁, 講談社, 1974.  
加藤正信, 大会と共に歩んだ神戸一中, 日本蹴球協会・全国高等学校体育連盟・毎日新聞社, 「全国高校サッカー40年史」, 61頁, 1962.
- 7) 中村正行, 再度制覇の夢ならず, 前掲書, 124頁。
- 8) 竹腰重丸・川本泰三, ヘルシング・ヴォリーの足跡, 日本蹴球協会, 蹴球, 第10巻, 第2・3号合併号, 25—33頁, 第4・5号合併号12—17頁, 第9号, 68—12頁。
- 9) 堀江忠男, 西独 O.F.C. を迎えて, 日本蹴球協会, 蹴球, 第10巻, 第7号, 4—34頁。  
朝日新聞, 28.5.13, 6.3, 6.6, 6.8大橋, 6.9大橋, 6.12大橋, 6.14大橋, 6.15大橋, 6.16大谷, 6.17大橋, 6.20日本蹴球協会理事山田午郎。
- 10) 木下勇他, 瑞典 D.I.F. を迎えて, 日本蹴球協会, 蹴球, 第11巻, 第1号, 4—23頁,  
朝日新聞, 28.10.29, 11.3, 11.20, 11.23大谷, 11.25大谷, 11.26大谷, 11.28大橋, 11.29, 11.30中条, 12.2大谷, 12.3ユールゴールデン アストレーボーチ。
- 11) 大谷四郎, サッカーフォーメイション, 朝日新聞, 28.2.10, 2.11。
- 12) 村岡博人他, 西独派遣チーム日記, 日本蹴球協会, 蹴球, 第10巻, 第8号, 5—43頁,  
村田博人, これがサッカーだ, 17—23頁, 至誠堂, 1966.  
大谷四郎, 学生サッカー欧州を往く, 朝日新聞, 28.9.23, 9.25, 9.27, 9.28, 10.1。
- 13) 竹腰重丸, 第15回ヘルシンキオリンピック大会報告書, 日本蹴球協会, 蹴球, 再刊第1号, 2—8頁, 第10巻, 第2・3号合併号, 4—8頁, 第4・5号合併号, 4—11頁, 第6号, 4—7頁。
- 14) 竹腰重丸, 前掲書, 第4・5号合併号, 4—11頁。
- 15) Joy, Bernard., *op. cit.*, pp. 41—50.
- 16) 朝日新聞, 30.1.22。
- 17) 中条一雄, ホッパー妙技を示す, 朝日新聞, 30.1.22。
- 18) 大谷四郎, 技術中心のサッカー, 朝日新聞, 30.1.23。
- 19) 竹腰重丸, 中共遠征第一報, 蹴球, 1957年11月号。  
竹腰重丸, 中共で試合をして, 朝日新聞, 32.11.1。
- 20) 中条一雄, 三年振り早大勝つ, 朝日新聞, 32.11.14。
- 21) 中条一雄, 関東大学サッカー総評, 朝日新聞, 32.12.3。

- 22) Weisweiler, Hennes., *op. cit.*, pp. 69—76.
- 23) 竹腰重丸, 大学チームの技術と戦法, 日本蹴球協会, サッカー, 第5号, 39—42頁。
- 24) 高橋英辰, ユースサッカー報告, 日本蹴球協会, サッカー, 第3号, 35頁。
- 25) 竹腰重丸, ベルーと対戦して, 日本蹴球協会, サッカー, 第5号, 29—32頁。  
朝日新聞, 35. 1. 25。
- 26) 中条一雄, 来日するソ連ロコモチフ, 朝日新聞, 35. 11. 23, 11. 28大谷, 12. 1大谷, 12. 11中条, 12. 12中条, 12. 15中条。
- 27) クラマー, デトマーと, 日本サッカーのために, 朝日新聞, 35. 12. 17, 12. 18。
- 28) 竹腰重丸, 4: 2: 4について, 日本蹴球協会, サッカー, 第7号, 29頁。
- 29) チリック, ミロバン, ヨゴの 4: 2: 4, 日本蹴球協会, サッカー, 第15号, 11—13頁。
- 30) チアナディ, アルパド, 世界選手権をチェコ・ハンガリーはこう見る, 岡野俊一郎訳, 日本蹴球協会, サッカー, 第25号, 33—37頁。
- 31) ヴィトラエル, ルドルフ, 4: 2: 4はすでに古くさいか, 前掲書, 38—41頁。
- 32) 中条一雄, 来日サッカーチーム, 朝日新聞, 37. 12. 5, 12. 6中条, 12. 8大谷, 12. 9大谷, 12. 10中条, 12. 12大谷, 12. 13大谷, 12. 14中条, 12. 17大谷。  
尚この大会から日本代表チーム監督は長沼健, コーチは岡野俊一郎となつた。
- 33) リンドバーグ, 日本チームに忠告する, 日本蹴球協会, サッカー, 第28号, 22—23頁。
- 34) ポノマリヨフ, 4: 2: 4について, 前掲書, 23—24頁。
- 35) 岡野俊一郎, ソ連欧州だより, 日本蹴球協会, サッカー, 第40号, 5—16頁, ソ連欧州遠征報告, 日本蹴球協会, サッカー, 第43号, 35—43頁。
- 36) Weisveiler, Hennes., *op. cit.*, pp. 66—80.
- 37) 第18回オリンピック東京大会記録, 日本蹴球協会, サッカー, 第42号, 3—34頁。
- 38) 長沼健, 4年間の努力の総て, 前掲書, 35—40頁。
- 39) 岡野俊一郎, 新たなスタートにあたりかく考え方かく希望する, 前掲書, 40—50頁。
- 40) 金子朋友, 体操の技術, 体育原理研究会編, 体育の原理, 第5号, 「体育における体力論技術論」, 171—172頁, 不昧堂, 1972。

- 41) 第17回全日本実業団選手権大会, 日本蹴球協会, サッカー, 第43号, 14—20頁。
- 42) 関東大学リーグ戦成績, 日本蹴球協会, サッカー, 第43号, 23—29頁。
- 43) 東西大学リーグ王座決定戦, 前掲書, 21—22頁。
- 44) 第44回全日本選手権大会, 日本蹴球協会, サッカー, 第45号, 11—22頁。
- 45) 岡野俊一郎, 関東大学リーグ総評, 日本蹴球協会, サッカー, 第43号, 31—34頁。
- 46) 岡野俊一郎, 全日本選手権大会をみて, 日本蹴球協会, サッカー, 第45号, 4—7頁。
- 47) 大谷四郎, 全日本選手権を斜めに見て, 前掲書, 8—10頁。
- 48) 第44回全国高校選手権大会, 日本蹴球協会, サッカー, 第54号, 20—37頁。

### (五)

これまで概観した通り, ベルリンの奇蹟以来東京オリンピックに至る道程は必ずしも順調な展開を示したとは言えない。諸外国が創造的な喜びを追求している時, 日本サッカー界の大部分はひたすら運動過程を铸型化し, 形式化し, 単純化してそのパターンを訓練することによって技術習得とする重大な誤認を長期に涉って繰り返して來た。特に戦争状態という特異な環境の内では, 画一的指導形態が対集団の最善の手段と信じられ, 技術を铸型化したパターンを基礎技術として, それを繰返しドリルすることが技術訓練と考えられてきたのも, 止むを得ない一面を持っていた。

その後, 運動学的素養の極めて高いクラマーを指導者に迎えて, 東京・メキシコと二度のオリンピックに好成績を残し, 従来の過誤は完全に払拭され, 世界的水準への到達も期待されたが, その後の進展状況は必ずしも期待通りとは言えない。

1961年(昭36年)4月, 東京オリンピックの強化対策の一環として再来日したクラマーは日本サッカー界の従来の技術習得体系の抜本的改革者として位置づけられるが, その技能構造に関する見解を要約すると次の通りである。

「1936年のベルリン大会でスウェーデンを破って以来20年以上, 世界の

### サッカー競技における組織的行動の原理についての一考察

サッカー競技は常に進歩を続けて来たが日本は数年前まで停滞したままであり、この停滞は退歩を意味している。従って日本が再びサッカーの世界的水準に達したいなら、協会の組織、選手や指導者や競技団体のトレーニング方法について新しい形態を見出すことが肝要である。」(機関紙サッカー第19号)として、ゲームは全て攻撃と防禦の切り替えの連続であり、このボールを奪った時と失った時の瞬間が戦術の最も初歩であり最大の価値であるとする見解を述べ、更にボールと味方競技者と相手側競技者の三者の相互関係をボールコントロール、コンビネーション、タクティクスとして把える技能構造を示している。

つまり、クラマーにとってサッカー競技の技能は相手に対するタクティクスを無視した個人のボールコントロールやグループのコンビネーションは無価値に等しく、この原理に従って実戦と相違した動作を伴う練習は、異質なパターンを形成する可能性が高い故、その練習過程はタクティクスから集団技能を抽出し、そこに必要なボールコントロールが練習出来る方法を実戦的場面から遊離しないように工夫しなければならぬとして、正確性を第一段階とし、順次実戦的攻防に至る発展段階が示されている(日本蹴球協会、技術講習会テキスト)。又別の機会には、サッカーの歴史を通して考察すると攻撃と防禦の何れが優位であるかは常に論争の対象であったが、今日では良く組織された防禦プレーの優位が支配的である。これに比して日本サッカーの防禦プレーは改良すべき点が多く、この理由で優秀な外国チームに対抗出来ないとする見解を示し、試合の決定的瞬間にはボールの回りには相手側よりも味方の競技者が多く集っていることは古来からの戦術的教訓であり、これは全競技者が攻撃と防禦の二つの使命を完全に果すことによって初めて可能となると述べている(日本蹴球協会、サッカー、第18号、試合における二つの使命)。

かって我が国が、新しい技術やその指導体系を移入し展開する段階で、それ等の構造を定型化し単純化することに起因する重大な錯誤を繰り返してきたことは前述の通りである。今又、日本サッカーは同種の傾向を顕著に

示している。日本サッカー競技界の指導的立場の岡野・平木らは、国際試合における我国サッカー競技者の最大の欠陥は意外性つまりプレーの変化の可能性、の欠如であると指摘している（日本蹴球協会、サッカー、第44号及びスポーツの科学的指導、サッカー）。これは当然技術習得段階の問題として把えねばならない。つまり学習上の主題、本稿では4:2:4システムをその主題としているが、が極めて順応性に欠ける固定的観念として認識されたり、その特殊機能的側面にのみ焦点が合わされ、その実体構造を正確に抽出出来なかったことと同時に、個人又は部分の運動現象としての個性的機能を現場で発見し、検証し、改良する努力を怠っていることが、画一的指導体系とあいまって、今日ともすれば順応性・柔軟性に欠ける、先見能力のない閉鎖スキル型技術傾向の競技者育成に直結したと考えるのが妥当である。

近代サッカー競技は、その防禦的機能において、より一層の組織的結合能力を、集団を構成する全てのメンバーに要求し、その結果極めて強固な防禦機能を發揮することを可能ならしめている。その反面、攻撃力において、特殊能力を保有する攻撃者の意外性を含む個性的機能によって組織的結合を打破する方向を示すことにより、かろうじて均衡が保たれている現況である。今後、組織的防禦能力がより一層有力な方向に傾斜し続ければ、やがて規則改正以外に打開策のない時代が到来する可能性は極めて強い。

然るに日本サッカー競技界は再度クラマー以前の錯誤を繰り返している。現在の急務は、その総力を投入して各国の国際的水準の防禦能力の実体構造を発見し、検証し、改良し、その指導体系を確立すべきであると考える。